

村野次郎創刊

香蘭



二〇二五年(令和七年)九月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

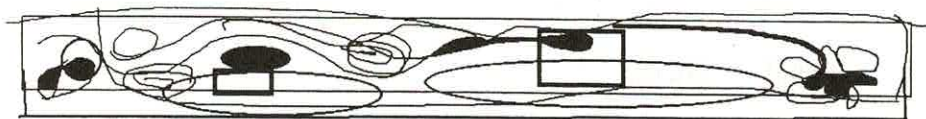
第一〇二卷第九号

2025年(令和7年)9月号

第102卷

第9号

通卷1137号



香 蘭

2025年(令和7年)9月号
第102巻 第9号 通巻1137号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(121)	市川 義和	表二
招待作品 奇数月連載⑫ 暁闇の酒	加藤 英彦	2
作品		4

一	24
二	30
三	37
推薦香蘭集	38

作品一	十首選(七月号) 丸山三枝子選	14
-----	-----------------	----

作品二・三	十首選(七月号) 渡辺礼比子選	16
-------	-----------------	----

村野次郎への旅(185) 昭和期の「香蘭」(二十)	千々和 久幸	18
---------------------------	--------	----

続・酔風船(21)「伊豆の踊子」やーい	千々和 久幸	21
---------------------	--------	----

一頁公論(51) 小町伝説	村上 美智代	22
---------------	--------	----

エッセイ・自由研究 村野次郎の「鳥獣虫魚」	田中 あさひ	44
-----------------------	--------	----

エッセイ・自由研究 U.S. スチール買取阻止に思うこと(その2)		
-----------------------------------	--	--

焦点(七月号) 日常の中の非日常	犬山 俊昭	46
------------------	-------	----

作品評(七月号)	桜井 京子	50
----------	-------	----

作品一	岡野 甫江	52
-----	-------	----

作品二	松沢 みどり	54
-----	--------	----

作品三	能城 春美	56
-----	-------	----

香蘭集	青山 侑市	58
-----	-------	----

七首抄(七月号)	鈴木(桂)・坂井・今井・福本	60
----------	----------------	----

緑地帯	坂井 君子・藤田 祐恵・高畠 崇	61
-----	------------------	----

明宝研究会 第一六五回 六月例会 現代短歌の最前線を読む	藤原 龍一郎	64
------------------------------	--------	----

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向		71
--------------------	--	----

歌会及び会合・会員消息・他		75
---------------	--	----

編集後記・新宿日記		80
-----------	--	----

表紙絵……山口 蓬春「桔梗」		表三
----------------	--	----

目次・緑地帯カット……和田 和雄		和雄
------------------	--	----

市川義和

村野次郎作品 私の愛誦歌 (121)

木の箱に活字光りて組まれつつ

命のゆらぐ歌となりゆく

『村野次郎歌集』

この歌は昭和四十二年、先生七十三歳の作である。小題「印刷工場」八首の二首目に置かれている。三首目に〈指先につぎつぎ光りいささかの誤字許されず組まるる活字〉があり、実際に現場に足を運んでの連作と推測できる。香蘭本誌の印刷を発注している会社の工場と思われる。昭和四十二年の本誌奥付によれば、東京製本印刷株式会社とある。

当時はまだ活版印刷が主流の時代だったので、鉛の活字がずらりと並ぶ現場では、まず文選工が一文字一文字活字を拾い、次に植字工さきざきが頁単位に組み上げる作業が繰り返られていた。そして下句のフレーズのように、〈命のゆらぐ歌となりゆく〉のだ。この表現は見事に詩に昇華されている。

印刷工程も時代とともに大きな変遷を遂げているが、活版印刷が主流だった時代を記録する貴重な一首とも言えよう。

『村野次郎全歌集』154頁 『村野次郎歌集』

暁闇の酒

余剰なるものを削ぎゆく鬚うすく伸びたる顎に刃をあわせつつ

酒は禁じられてはおらず退院の午後をひとりのワインで祝う

父逝きて十四年経つ母逝きて八か月過ぎともす迎え火

採血のたびに名を問う看護師よわたしはだれであればよいのか

火のような古酒を呷って朝発ちぬ沖縄の血は享けておらねど

だれに仆されし女神かまなそこにひかる一尾が身をひるがえす

燈火^{あかり}たかく宙にかかげて右腕のつけ根はしろき波があらえり

口ずさむ演歌のような老いと酌む山廃八合あけて別れつ

もう疲れたわと母はかあさんはどこと吐息のごとき眸^めをみす

だれを待つでもないひとり夜の部屋の灯^ひを消す窓のすべてを閉ざし

今年五月に総合誌「現代短歌」は「タイムスリップ194X」を特集した。任意の戦時に瞬間移動したという前提で、戦後生まれの二十名が小文と作品十二首を寄せている。当然のことながら時間軸は大きくゆがむ。

松村由利子は1942年に舞い降りた。激戦の果て日本は徐々に敗色を濃くしてゆく。そこで彼女は若き祖父母とまだ五歳になったばかりの母と一緒に暮らし始めるのだ。

子らの歌う「ヘイタイサンノオカゲデス」
唱和できずに一人うつむく

レーニン像みたいに戦後壊される奉安殿
にみな敬礼す

子らが歌うのは当時の童謡「兵隊さんよありがたう」である。今日学校に行けるのも、家族で楽しい夕餉を囲めるのもすべて「御国の為に」戦った「兵隊さんの御蔭です」と歌われる。軍国歌謡として公募された佳作一席であり、作詞が町の印刷工であったことを思えば、国民的昂揚は十分あったのだろう。

戦後生まれの松村は、あの戦争がどのような結果に終わったかを知っている。唱和できずに俯くしかないではないか。それは時代へのせめてもの抵抗なのではなかったか。

奉安殿とは御真影と教育勅語を納めた神聖な建物で当時全学校に設置された。その前を通るときには最敬礼が義務づけられた。戦後GHQにより解体撤去されたことを知る松村に御真影の前で敬礼する児らはどのように映ったろう。いや、その後の史実を語れなかった自らとどう向き合ったのか。あのとき松村が視たのは、すでに壊された奉安殿の跡地に敬礼する幻の児らだったかもしれない。

現在の位置から当時を論評することは容易い。でも、文学とは時代の暗部を今の視点で糺すのではなく、その暗部を懸命に生きたあられもなさを描くことのような気もする。

乳がほしくて泣きだすちさき口をふさぎ
鼻孔を塞ぐわがてのひらが

同じ特集の拙作である。わたしは1945年の沖縄に降り立った。米軍に気づかれないようにガマで泣きだす乳児の口を鼻孔を塞いだあはれはわたしではなかったか。戦争は平時ではあり得ない（私）が顔を現わす。

投降しようといえば非国民として銃口を向けられたろう。臆病にもわたしは兵士に笑みを返して口を噤むのだ。そんなわたしを語ることからしかわたしの戦後は始まらない。

四 選 者 の 作 品

紫陽花の雨

平 塚 千々和 久 幸

薔薇、牡丹、穴子サンドも踊り出す「平塚よさこい祭り」の列に
閉店せし滝カバン店の傍らの空地の紫陽花が雨に濡れいる
紫陽花の花群^{はなむら}見つつ雨の坂くだりて来たり梅雨まだ明けず
何のため生きてるんでしよう ベランダの雀の声がここまで届く
理屈なら水の上でも歩けると言いたるきみも離れ行きしよ
ガパナンス、コンプライアンスいつしかに人間管理も横文字となる
懸案の論文一本書き上げて遊覧船に乗らんときたり
亡き妻の形見のリュック肩にのせ一万歩めざし今日も歩める
YOKOSUKA (二) 横 浜 渡 辺 礼比子
終点の品川近し 本読みておりたる人が葉を挟む
もう少し眠らんとして眠りしが無限ループに吸いこまれたる
植え込みに昼顔這いてこともなし米国横須賀海軍基地はも
《米海軍横須賀施設》門前のKOBANは誰のためのものなる
「駐車禁止 米国海軍憲兵司令部」《憲兵》とう語は死語ならずけり
わが子らの軍港クルーズに物申す 鬱陶しい母と言われてもよし

軍艦の先に揺れいつ 実物の旭日旗をぞ初めて見たる
好きだったレストラン「アマルフィ」が支店出す軍艦望む横須賀湾岸

全国大会 (二)

鎌 倉 高 畠 憲 子

雪を詠む歌の出されておのおのが当地に降りたる雪を語れる
京の雪詠む人あれば由布岳の冠雪語る九州の人
除虫菊雪のごとくに咲くを言ふ雪無き島より来たる歌びと
護摩焚きの歌に司会の土井さんが生き生き語る「煩惱とは」を
深川のお不動様の護摩の風にあたれるごとき分散歌会

大会の朝に即詠ものしたる代表 それは煽り運転

大会より帰って佐重郎氏の計報聞く実朝祭に会ひし日遠く
左手にて書かれし色紙の色褪せぬ佐重郎氏の若かりし日よ

右往左往

我孫子 丸 山 三枝子

雨のなかに雨ふりつづく月曜日消えたファイルはまだ見つからず
肯定と否定の思い交錯しついに投げ出す ある晴れた日に
水無月の歩道に散りて敷き詰めるエゴの白花風にさらわる
言うほどのことでもないが木洩れ日のまだらに揺れる道を行くなり
八重咲きの十薬みれば言うだろう一重がいいと 母ならきつと
伯母の家は消えて無くなり海べりをみどりの風が吹き抜けてゆく
海底にありし石ころ隆起して白一色の浜となり果つ
苦みある朝のコーヒー飲みながら右往左往の来し方だつた

作品一 十首選



(七月号作品から)

丸山 三枝子 選

・代官町なぎさ通りの眼科医のプランターにはすみれが咲いて

千々和久幸

「代官町なぎさ通り」は実在の道らしい。「なぎさ通り」だから海べりにある「眼科医」。一息に読み下せる、それでいて重苦しい意味を孕まないリズムカルな軽妙さが心地よい。これといった何かを訴えようとしていない心地よさ、爽やかさとも言おうか。すみれ咲く春さきのある日のスケッチなのだが、この「眼科医」が、例えば喫茶店や花屋などだったら甘すぎて私は立ち止まらなかっただろう。二句と三句の「の」の助詞と、四句の「には」の助詞を受ける結句の言いさしさがさり気ない。春さきの海風が吹き抜けて行つたような爽やかさだ。

・医院減りバス減り物価高騰す 君影草の香に立つ春を

渡辺礼比子

「君影草」は鈴蘭の別称である。鈴蘭は白い六弁の壺状の小花をつける可憐な花で芳香があり香水の原料にもなる。ここでは鈴蘭と詠まず「君影草」と表記したことで歌に艶なる情趣が加味された。心惹かれたのは、上句のさまざまな社会現象と、一字空けの下句の「君

影草」の美しい自然の花との鮮やかな対比だ。ただこの手法はパターンがあるから用心したい。私はこの鈴蘭の別称を知らなかったので学んだ。

・人の目にふることなき山桜天城の空をふぶきてわたれ

朝香ふさ枝

「山桜」は高山や森林の深い処など、人の手の届かない処で春になると白々とした花を掲げその存在を現す。そして人知れず散る孤高の桜で華やかではない風情が好ましい。天城の別荘で四季折々の花を愛で自然を詠み続けている作者。思いの丈を高く打ち上げた心延えが窺え、詩的な世界に手をかざしている歌だ。作者は今年の生日で米寿を迎える。ありきたりではない下句のフレーズには、四季折々の節句を祝い、歳月を丁寧に生きている作者自身への自負と、応援の思いも重ねられているかも知れない。

・心にある隙間みたいな領域はさみしさだけが住んでゐるのだ

石井 雅子

口語口調の文体の切れ味に惹かれた。「心にある隙間みたいな領域」は、日常の煩雑さに紛れて忘れているのだが、ふと我に帰ったときに襲ってくる。我々の年齢になるとそれは、悦びや幸福感のプラスの感情ではなく、「さみしさ」や悲しみの方が多い。「さみしさ」だけが住んでゐるのだ」と断定しながら、ここには不思議と悲壮感も暗さも感じられない。それは下句の哀愁を含む断定口調の故であろう。こんな文体も普段の作者らしくて、魅せられる。

・つかえず食べ終えし母にいつも言う無事な完食」苦勞様です

伊藤 康子

ここでは、卒寿の母上の「無事な完食」にホッと胸をなで下ろす

作者が窺える。高齢者の三度の食事は神経を使う日々の一大仕事だ。けれども作者はそんなそぶりは見せない。軽いタッチの下句のフレーズには母への愛情が見え隠れする。2月号の近詠十五首では「古い母は気がかりなると指折りぬ地震強盗家事康子とか」の母性たつぷりのユーモアに富む歌があった。まるでエールの交換のようだ。母と娘はお互いに励まし合って生きている、昨日今日も明日も。

・もの言わぬ揚羽となりてあてどなく花から花へ飛びたくもあり

江口 綱代

「もの言わぬ揚羽」と、言葉を持っている人間との対比が思われる。社会生活をしている我々には、喜怒哀楽に加えて苛立ちや抵抗、逡巡や後悔などもあり、日々窮屈に生きている。そんな我々だから時には、「もの言わぬ揚羽となりて」自由に「花から花へ飛びたくも」なる。「もの言わぬ」自由、もの言われぬ自由は人間には必要なのだろう。そんなことを思わせてくれる一首だ。

・今日できることを明日までのばしつづ三度の御飯はしつかり食べる

大井田啓子

思わずクスクスとさせられる。「今日できることを明日までのば」す怠惰な己への自己嫌悪の歌なのだが、この裏側には自己反省が隠れている。私もそうだが、先延ばしにしてギリギリまでやらない人はけっこう居そうな気がする。多くの人は、このように辻褃合わせて身勝手に生きているのではないか。そんな自分を茶化しているような歌だ。アイロニカルな歌への作者のいたずら心でもあろうか。

・リビングにドラセナ生かし四十年水を遣りつづ我も生き来し

川原 優子

観葉植物の「ドラセナ」は、幸福の木の別名で一時期流行った。

「四十年」も生かした作者に先ずは敬意を表したい。幸福の木の名前で歌にもよく詠まれたがここでは「ドラセナ」の、あまり美しくない響きが面白い。生物は水が切れたら死んで了う、との当然が、下句のさりとした表現で気づかされる。この「ドラセナ」と作者とは、戦友のような間柄になっているのだろう。人間も植物も、生き続けてゆくことは容易ではないのだから。

・人生の旅の途中を公園に見知らぬ人と語らいており

白井 綱子

たまたま出会った「見知らぬ人」と語り合うことは、さして珍しいことではない。それを「人生の旅の途中」と表現したことで俄然歌が膨らんだ。「公園」の場面設定がいかにも自然である。

事実だけを言っているのに、惹き付けられるのは、「人生の旅の途中を」の入り方による。感情移入を避けて事実だけを言っている簡素な表現の清々しさに打たれた。

・在りし日の夫との慣ひ引き継ぎて九条を読む憲法記念日

西野美智代

今年の憲法記念日は五月三日だった。裁判所の判事であったご主人との習慣は、憲法九条を読んで戦争放棄を確認することであったと言う。「九条」の長い内容は私には難しくてお手あげなのだが、作者は、憲法記念日が巡ってくる度に、亡きご主人との習慣を守り、これからも憲法九条を読み返すことだろう。メディアでみる戦争まみれの今の世界情勢を見るにつけ、戦争は御免だと思つづくと思う。この一首は幾分消極的な反戦歌と読めなくもないと思う。

作品二、三 十首選



(七月号作品から)

渡 辺 礼比子 選

〈作品二〉

・ウィルスもブラックバイトもやすやすと国境越える **ビバ、グローバリズム**

小笹 岐美子

「国境を越える」という表現は、「音楽」「スポーツ」などの語に続けて使われることが多いが、ここではマイナスイメージの二語を受け、シニカルな味わいを出している。結句の「ビバ、グローバリズム」については「地球主義、バンザイ」と、作者は意図的に逆説的なものいをしてるのであろう。さらにこの字余りが、皮肉たっぷりな気分の演出に磨きをかけている。鋭いパンチの効いた時事諷刺と読んだ。

・一月の妻の変容著しく介護川柳見ても笑えぬ

小原 裕光

妻の介護をする作者は、ウェブ上で、深刻な悩みも笑いとはす川柳作品に触れ、慰められることが多かったのかもしれない。しかしながら、この月はそうはいかなかった。妻の病状が思わしくなく、笑う余裕さえなかった。家族を介護する生活における切実な思いがひしひしと伝わる一首である。なお、三句の「著しく」は口語ならこのままで間違いではないが、文語の「著し」の連用形として「著

く」を用いれば、一首全体のリズムが整うのではないか。

・読めばよし読まずともよしと決めおいて書評欄の切り抜きしまう

篠永 路子

新聞の切り抜きなどというものは、いつか読もうと思うだけで、知らぬ間にファイルに溜り、ストレスの原因になったりもするものである。しかし作者は「読めばよし読まずともよし」とはじめから決めておくという。このフリーズはなかなか奥が深い。何事にも、こんなふうに肩の力を抜いて臨むことができれば理想的だ。作者の無理をしない生き方の伝わってくる、印象深い作品。

・子待ちて日永となれる春の宵木の芽ふくらむ音ありやなし

杉山 伊都子

離れ住むわが子 wait っている春の日。午後には来るといつていたのに、夕方になっても、待ち人來らず。日がながくなったのでいつまでも外が明るく、待ち遠しさは募るばかりである。敏感になつてゐる耳には、時に、木の芽の膨らむ音が聞こえたような気さえたのであった。「ありやなし」という言い回しも抑制が効いていて巧みであり、繊細な心の動きの伝わる一首。

・こうやって忘れゆくのだステークを食べてビールを飲んだりもし

安田 恵子

一連の作品を読むと、連れ合いが亡くなってからまだ日の浅いことが解る。肉が食べられる、ビールが飲めるというのは、生きる氣力が戻りつつある証であろう。しかし、作者は、日常に回帰していくことにさえ、負い目を感じてしまう。投げやりともとれる「こうやって忘れゆくのだ」という独白に、実はまだまだ埋めることので

きない心の空白がうかがえる。

・手が足の爪に届かずケアの店に靴下履き替へ爪切りに行く

山下 紘正

へえ、世の中にはそんな商売があるのかとまず驚いた。誰だって歳をとれば、体は固くなり、片足立ちができない、腕立て伏せができないなど、ないない尽くしになるのが悩ましい。この作者の場合、足指に手が届かなくなり、爪が切れなくなったという。他人であるプロのスタッフに身を（足を）任せるに当たって、相手を慮って靴下を履き替えたという。老いの嘆きなどをいわず、こうした日常をさらっと切り取って、一首にしてみせた作者のエスプリに拍手。

・一駅をオオスズメバチ乗り込んで降りてゆきたりつまらないとき

協谷 房子

オオスズメバチは日本に生息する最大の蜂で、毒性も強いと聞く。こんな招かれざる客が紛れ込んできたら、車中はさぞ大騒ぎになったことだろう。しかし幸いなことに、この蜂は一駅で降りていつてくれたという。四句切れのこの一首、結句の「つまらないとき」が絶妙な働きをしている。電車に乗って違う世界を見たつまらないよね、ひとを大騒ぎさせてみたつまらないよね、蜂のつぶやきに、淡然とほほ笑んでいる作者の姿が重なるつまらない。

〈作品三〉

・ほろほろと春は来たりぬ八年を経て亡き夫のセーター捨つる

石川 詔子

「ほろほろ」はキジの声や、涙のこぼれるさま、花が散るさまを形容するときに使われることが多い。しかしここでは意味ではなく、

ある種の気分を表すオノマトベとして効果的に働いている。内容は亡き夫への挽歌であり、物悲しい気分の歌だが、主観は言わず、「セーター」を捨てるという動作によって作者の内面を表現している。「八年」という数字にもリアリティがある。さりげなく詠んでいるように見えて、細部に神経の行き届いた一首である。

・御食つ国若狭小浜はこぬか雨この海を見て拉致されし人

川久保百子

拉致被害者をテーマにした社会詠であり、この一首の重要な部分は結句である。しかし、そこに辿り着くまでに、「若狭」の枕詞「御食つ国」を出し、また「こぬか雨」を降らせ、背景として小浜の海を配置するという、手の込んだ構成に目を見張った。遊びの部分をつぶりとることにより、かえって歌の核というべき結句にしっかりと焦点を当てている点に注目したい。

・喜寿になり若者見ればうらやましさと平和な時代を生きた

小城 勝相

年齢の節目を迎え、来し方行く末に思いを馳せる作者である。高齢の自分としては、健康で可能性に満ちた若者を見ると、ついつい羨みたくもなる。しかし一方では、これからの時代に生きる彼らは、先々本当に幸せになれるのだろうか、疑問を抱かざるを得ない。八十年の間、日本には戦争がなかった。それを思えば、自分たちは物が足りなくても恵まれた時代に生きてきたとつくづく思う。だが現在、世界各地では紛争が絶えず、国の先行きも不透明である。この下句は、とりあえず自分はよかったと肯定的な感慨に浸っているのではなく、先行きを憂える作者の、ため息まじりの独白であるように読めた。

村野次郎への旅 (185)

昭和期の「香蘭」(二十)

千々和 久幸

今月から「香蘭」第五卷第十一號、昭和二(1927)年十一月一日發行の本誌を読むことにする。表紙畫裏畫及び題字は森田恒友、奥付の編輯兼發行人の田中次郎に変わりはない。総頁は56頁で前號のような広告はない。

目次から見ていこう。巻頭の短歌欄は八名が出詠。村野次郎、橋本敏夫、南部若松丸、芥子澤新之介、眞島勝郎、杉浦翠子。

杉浦翠子のエッセイ「最近に死んだ二人の文豪―芥川龍之介、徳富蘆花」、次いで短歌欄は以下の十名、成田憲三、松丸甕一郎、西村孝、佐藤達夫、日根淳吉、若林昇、庚申薫、遠藤正人、久米蒼月、杉本喜一。

前月歌壇合評は杉浦翠子、池上秋石、深野庫之介、本間樂寛、筏井嘉一。

作品欄の霜月集は大貫迪子、今福公一ほか十三名、露霜集(杉浦翠子選)は平沼良子ほか十五名、聽雨集(酒井廣治選)に十五名、

十一月歌卷(筏井嘉一選)に十六名、白菊集(村野次郎選)に十九名がそれぞれが出詠、そして編輯後記(政一・次郎)となっている。例によつて巻頭作品から見ている。

病 葉

村野次郎

鎌倉にて逝去せる伯父を悼む

- ①わがなやみ消すによしなし裏山の踏むに
音なき濕りわくら葉
- ②竹の葉にあかとときふりしつゆ霜の消ゆるは
かなさをわれは見にけり
- ③逝く人をゆかしめて家居静かなり庭のもみ
ち葉うつろひそめぬ
- ④時雨すぎて朝日あかるき雑木々のしづくに
濡れて幹あらはなり
- ⑤用事のひまを公園に來てこころ安らげり白
菊の花をそぞろに愛す(あけくれ)

挽歌一連で五首、先生の寡作はこれまでも見てきたが相変わらずの作品数である。これが例月の先生のペースなのだろう。

①の歌、「よしなし」は「由無し」で理由がない、根拠がないの意でここでは「わがなやみは」どうにも拭いようがない」と、その氣持の遣り場のなさを讀んでおこう。

ついでに言えば、徒然草の序の段の「……ここに映りゆくよしなしことを……」は「心に浮かんでくる随想を、あれこれと……」(川瀬一馬)と訳されているが、感心しない。ここはあつさり「とりとめもないこと、つまらないこと」(旺文社古語辞典)と「とりとめもなく」讀んだ方が氣分に添うだろう。

もつとも先生の心情は言葉より「病葉」に託されているから余計な詮索は無用かも知れない。

②の歌、作者の氣持は目前の「つゆ霜の消ゆるはかなさ」に移入されている。「つゆ霜」は昨今では殆ど見る機会がないが、①露と霜。②秋の末に、露が凍って霜となったもの(広辞苑)で、先の「古語辞典」には「露と霜。また、晩秋に露が凍って薄い霜のようになつ

たもの」と広辞苑と異同はない。

③及び④の歌、身近な人を失った喪失感はこのところにも出ている。普段は気付かなかったものが見えてくるのだ。

⑤の歌、気分は一連の悲しみを曳行しているが、もう喪の世界から日常に戻ったことが窺える。

呼び物(?)の前月歌壇合評を読む。評者は杉浦翠子、深野庫之介、池上秋石、本間樂寛、筏井嘉一である。

心の花

斎藤 瀏

眠りつ、列に運ばれるたりけり先頭とまりて衝きあたりたる

朝露の深草原に戦ねりぬれにぞぬれて臍の冷たき

(翠子)第一のお歌は私にはよく解りません。これは連作なのでせうか、前から讀んで行けば解るものとして、さういふ種の連作なら、連作としての生命がないのです。連作論は後に譲るとして「眠りつつ列に」といふ、それで人間ひとりこの列にあるのを思はなければなりません。それは思ひます。だが稀薄で下句と上句との連絡が分かりません。兵隊さ

んがこの歌の中に「人ゐるのですか、二人ゐるのですか」。

(庫之介) (一) 歌境は、私達の意識の中で、特別的に選ばれるべきであるか、また無擇で差支無いか、方向があるか無いか。といふ點に就いて私は考へる。即ち、この歌が本質的に、か悪いかを考へる。それは然し、この歌に限つた事でなく、私自身を對稱としての批判である様だ。といふのは、私自身全く感ひ苦しんでゐる昨今、動もすれば生活記録に過ぎないと思はるゝ歌にひどく心を惹かるゝ場合がある。今でも見向きもしなかつた所に引き寄せられるといふのは對稱に力があるのか。それともまた自分の迂りつゝある傾向が悪いのか。といつも考へさせられてゐるからだ。

私は然し、自分の傾向を肯定したりはしない。「動き」は必然的であるが、「よりよき方向へ」との批判は失はせたくない。そして今の所、私は未だ斯くの如き歌の本質について肯定し得ないのである。但し、啓蒙して下さる方があれば、それは切に望ましいものである。技巧上の問題―「列に運ばれ」といふ言葉は妥当であらうが「先頭とまりて」は不用意

である。尤も作者が第二伍にあつたとすれば格別だが。「衝きあたる」は唐突で却つていゝ。「たる」もこの場合いゝと思ふ。

(二) この頃の歌壇の一つの傾向が著しく技巧本位となりつゝあるのはどういふものか。「萬葉から古今への道程を繰り返すのが歌の常道で、今、萬葉の末期に相當する今日、古今への道程を踏むのは已むを得ぬ當然な歸趣であらう。」といふことを聞いたことがあるが、假に然りとせよ、古今の風をそのまゝ、内容も格調も言葉の技巧もそのまゝ、踏襲は何事ぞ、である。私達は寧ろ、新々々古今へ行くべきであらう。そこに時代性があり、眞實があり、絢爛たる美の光がある。單なる遊戯は見逃せぬ。「臍の冷たさ」で新鮮がらうとしても、それは、神をつけて變なことを云ふ茶番狂言の様なものだ。この茶番狂言に類する惡趣味を出でぬ。

庫之介の批評は、批評の場で短歌に対する基本姿勢を長々と聞かされた気がする。氏はわたくしが駆け出しの時代に幾度も顔を合せている。最終的には、自らの選歌欄の数名を引き連れて「香蘭」から独立された。

続・酔風船 (21)

千々和 久幸

「伊豆の踊子」やーい

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白こんがしりの着物に袴をはき、學生カバンを肩にかけてゐた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。

川端康成『伊豆の踊子』の書き出しの部分である。2025年5月29日午前11時頃、わたしは「香蘭」編集部の数名と連れだって日本近代文学館で開催されていた「白秋万華鏡」の展示室に居た。ひと通り白秋の世界を堪能した後、同時に隣室で開催されていた「川端康成の青春」にも一人足を運んだのだった。

その折、わたしの詩友であった今は亡き山本哲也のことを思い出していた。彼もわたしもまだ二十代、「この時代を華麗に騒がしく駆け抜けよう」を合言葉に福岡市で詩誌「碧」を創刊して間なくだった。ある日歩きながら突然、彼からこんな質問を受けた。

— あんたねえ、『伊豆の踊子』の主人公がなぜ伊豆の旅に出たか知つとるね？

— うーん、なぜかいな、踊子との淡い交流がメインで、ま、文学青年の青春の彷徨かな。

— 駄目、だめ。そんな概念的把握じゃダメ。答えになつたらん。

ちゃんと読んでごらん、たつた一行やが旅に出た理由が書いてある。

— へえ、踊子の方に気を取られて全く気づかなかつたな。

彼はその頃、福岡県下では(いや日本でも)名門修猷館高校の国語の教諭だった。たとえば大学入試の現代文の読解をさせたら、彼の右に出る者は居ないと先輩教諭は口を揃えて彼の読解力を賞讃した。で、彼は恐らく生徒にも同じ質問をしたのだろう。わたしはあつさり降参して彼の答えを聞いたのだった。

— そんなことを思い出しながら、つい懐かしくなつて新潮社の昭和42年版(第五十四)を引つ張り出して確かめたのだった。そこにはこう書かれていた。

— 二十歳の私は自分の性質が孤兒根性で歪んでゐると厳しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪へ切れないで伊豆の旅に出て來てゐるのだった。(23頁)

三島由紀夫はこの本の解説でこう書いている。

— 「伊豆の踊子」は、もつと長い草稿の一部分であつたことが、全集のあとがきにも記されてゐる。これは偶然この作家の小説技術を暗示する挿話で、すでに「十六歳の日記」に見られるやうな、作者の目に映つた現實のどの部分を裁斷しても作品の構圖ができあがるといふ稀な天稟の證據物件がここにも見られるのである。

山本の答を聞き、三島の解説を読めば、わたしはもう満腹である。わたしにも山本にも青春があつたことを追体験出来ればそれでいい。さらば青春、と言えbaumもう振り返ることはない。

一頁公論

(52)

小町伝説

村上美智代

・花の色はうつりにけりないたづらに我が身
世にふるながめせしみに

誰もが百人一首などで一度は出会ったであろうこの歌は、九世紀後半の六歌仙唯一の女流歌人、小野小町の詠んだ歌である。

小町は優れた歌人で絶世の美女と言うことだが、その経歴は謎に包まれており、多くの伝説を生んだ。三千人の男性を無視し、相手にしなかったと言う彼女は理想が高く、関心がなかった訳ではない。激しく哀しい恋の歌や、待ち侘びる切ない女心を詠んだ歌が数多くあるからだ。思うに小町は恋もし、男性の心変りに苦しみ、そのような男性に失望したのではないのか。自分だけを愛してくれる男性を求めたのだろう。平安貴族の一夫多妻と言う結婚を拒否することによって相手の心を

探ったのではないのだろうか。女性の意志を無視した結婚に反感を抱き、男性拒絶の態度を取っていたのかも知れぬ。

・色見えでうつろふものは世の中の人の心の
花にぞありける

前出の二首の歌からは、世の無常、人の心や容姿の変化に悩む様子が窺える。先の歌は、春の長雨をぼんやり眺めているうちにいつの間にか花の色もすっかり色褪せてしまったと花にたとえ、自分の美しさも色褪せたと嘆き、後の歌は色には見えないで褪せていくものは男女の心のなかにある花と言うものなんだなあと、どちらも身と心の移ろい易さを詠んでいるのだ。

熱心に求愛する深草少将の愛を、百日通うことが出来たらと受け入れた小町。九十九日目に大雪のために凍死と言う百夜通いの伝説がある。何とも哀れな結末であろうか。

美人の誉れ高い小町が晩年流浪の果てに、洛北静原の地で亡くなりその生涯は、

・吾れ死なば焼くな埋むな野にさらせやせた

る犬の腹こやせ

と辞世の句を残したと伝えられ、野晒しになり骨骸の目から薄が生えていたと言う小町伝説を生んだ。恵心僧都（源信和尚）がその亡骸を哀れみ弔ったのだった。

現在、左京区静海市原町の補陀洛寺ふだろくじには、小町ゆかりの遺跡があり終焉の地として通称「小町寺」と呼ばれている。私がこの地を訪れたのは二十年前の一月、今にも雪が降り出しそうな底冷えのする日だった。補陀洛寺（小町寺）にお参りし、小町老衰像を拝観し、境内に出ると雪が降り出していた。小町と深草少将の供養塔に手を合わせ、雪の中でしばし往昔を偲んだ。

深草少将は毎夜小町の元に通っているであろうと少しロマンチックな気分になりつつ、激しくなる雪の小町寺を後にした。

虚は実であり、実は虚であるゆえに伝承されたのであり、またそれゆえにあの小野小町は今も我々の胸の中に生き続けているのである。

『小野小町追跡』片桐洋一著



②正面が小野小町供養塔。左に深草少将の供養塔が配置されている



①京都市左京区静海市市原町にある補陀洛寺に安置されている「小町老衰像」

香蘭叢書 (251～260篇)

260篇

飯島智恵子歌集『草木瓜の咲く家』ながらみ書房

259篇

渡辺君子歌集『鹿の来る庭』いりの舎

258篇

満木好美歌集『黄金家族』角川書店

257篇

千々和久幸歌集『生きてはみたが』砂子屋書房

256篇

香山静子歌集『銀の苔』ながらみ書房

255篇

坪裕歌集『祭り太鼓はにぎやかに』短歌研究社

254篇

西野美智代歌集『若苗色』本阿弥書店

253篇

桜井京子歌集『超高層の憂鬱』角川平成歌人双書

252篇

斎藤俊子歌集『春の扉』短歌研究社

251篇

千々和久幸エッセイ集

『酔風船—Q氏のいたすら日記』ながらみ書房